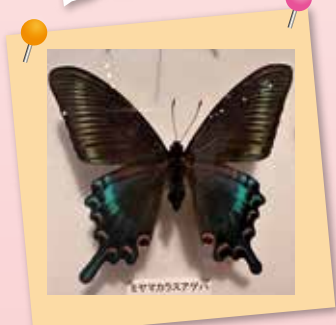


MUSEUM EYES

ミュージアム・アイズ

Vol. 80

NEWS
展示 Zoom in!
博物館研究最前線
収蔵室から
M2 カタログ



特集

大学博物館の可能性

明治大学博物館長 × 広島大学総合博物館長

Mm × **U**
MEIJI UNIVERSITY MUSEUM Hiroshima University Museum



NEWS 01

明治大学博物館／ 南山大学人類学博物館交換展示ギャラリートーク



展示解説をする島田学芸員

博物館は南山大学人類学博物館との間で協定を結び、相互の特色ある収蔵資料を交換出展する展示会を実施しています。今年度の交換展示は昨年の9月24日から11月5日までの会期で、南山大学では「化石人類の系統と絶滅動物―明治大学博物館コレクションより―」、本学ではアフリカの木彫り芸術品を紹介する「南山大学人類学博物館のマコニア彫刻たち」を開催しました。10月22日と29日にはそれぞれ展示担当者によるギャラリートークが実施され、本学会場では対面とオンラインによるハイブリッド方式で22名、南山大学では対面方式で15名が受講しました。

NEWS 02

島田和高学芸員が 日本旧石器学会賞を受賞しました



島田学芸員が担当した展示
図録はミュージアムショップで販売中！
左：『氷河時代のヒト・環境・文化 THE ICE AGE WORLD』
右：『氷期の狩人は黒曜石の山をめざす―明治大学の黒曜石考古学―ガイドブック』

2022年6月、当館の島田和高学芸員に対し、日本旧石器学会より2021年度「日本旧石器学会賞」が授与されました。同賞は、旧石器研究の発展に貢献し、優れた業績を挙げた学会員に与えられる荣誉ある賞です。
受賞理由では、旧石器時代に日本列島に現れたホモ・サピエンスによる黒曜石利用の変遷を、環状ブロック群などの膨大なデータと環境の変化を含めた研究によって明らかにした点、そして明治大学博物館で島田学芸員が担当した特別展や展示図録において日本列島の旧石器時代資料を網羅的に扱い、旧石器時代研究の普及と啓発に大きく貢献した点が高く評価されました。

NEWS 03

ナイトミュージアムを実施



ナイトミュージアムの様子



「捕者めいじろうアクリルスタンド」を手に喜ぶ参加者

捕者めいじろうアクリルスタンド

2022年10月15日、本学学生を対象とした「ナイトミュージアム2022」招待状は展示室から、閉館後の博物館を用いて、通常よりも照度を落とした常設展示室での謎解きイベントを通し、展示品について学ぶもの。参加者には、本イベントを企画した博物館学生広報アンバサダーから「捕者めいじろうアクリルスタンド」が記念品として手渡され、とっても可愛い！などの歓声が上がっていた。

大学博物館の可能性

明治大学博物館長

千葉 修身

CHIBA OSAMI

商学部教授

研究テーマは「現代ドイツ会計制度の在り方」など

広島大学総合博物館長

中坪 孝之

NAKATSUBO TAKAYUKI

統合生命科学研究科教授

研究テーマは「外来植物・希少植物の生態学」など

両大学間の交流

千葉 両大学の交流は、実は考古学研究ではだいぶ前からあり、1963（昭和38）年の帝釈峡遺跡群（広島県庄原市）共同調査にまで歴史を遡ることができます。その後、多様な学問領域で教育研究の連携が進み、2009（平成21）年には明治大学と広島大学との包括協定が締結されました。

中坪 直近では、2021年夏、ミュージアムキャラクターアワード（アイエム）にヒロッグ（広大）とめいじろう（明大）が参加、接戦の中、両館のファンからコラボグッズを期待する声が出たことで、広報分野での連携が進みました。ヒロッグは2020年の初出場から3年連続3位の成績なので、2023年こそはグランプリを目指します。応援してください！

千葉 今年の開催期間は、私も1日一回投票します（笑）

両館のTwitterも
要チェック！！



広島大学総合博物館



明治大学博物館



ヒロッグ

広島大学の「広(hiro)」とカエルを意味する「フログ(frog)」が由来。日々すてきな博物館を目指して頑張っている。



めいじろう

“森の賢者”と呼ばれるフクロウがモチーフ。収蔵資料の「十手」と「御用提灯」を携えた捕方姿。

SNSでも交流



大学まるごとミュージアム

千葉 昨日、キャンパス内の遺跡や埋蔵文化財調査部門を拝見しましたが、東広島キャンパスは本当に広いですね。

中坪 キャンパス面積は約249ヘクタールあります(MAZDA Zoom In Zoom スタジアム広島約49個分)。常設展示を行う本館に加え、サテライト館、企画展示スペース、発見の小径(散歩道)などがあり、本館を核にこれらをネットワーク化することで大学全体に広く博物館機能を持たせています。身近な里山の自然に富み、キツネ・タヌキ・テンなども現れ、これら動植物も展示の1つと考えています。



広島大学総合博物館では、キャンパス周辺に生息する様々な生き物の剥製も展示。

社会貢献

中坪 大学博物館の使命として社会貢献があります。広大と東広島市との連携事業「Town & Gown Office」の「モンプロジェクト」として、博物館では県央地域の活性化に取り組んでいます。東広島市の人口は全体的には微増しているのですが、中心部に人口増が偏り、山間部は過疎化が進行しています。昨夏、市内の豊栄町(とよさかちょう)で出張展示「県央に自然史博物館がやってくる!」を開催しました。豊栄町の人口は約3000名なのですが、来場者は2241名を数え、リピーターが多く、家族連れが目立ちました。

千葉 明大では、キャンパス所在の自治体に限らず、所蔵品の研究成果に基づき展示を各所と連携して展開



千葉修身 明大館長

学生による活動

千葉 近年、大学博物館の運営に当たっては、学生が大きな役割を担いつつあると思います。明大では、コロナ禍で大きな変革を余儀なくされ、新たな学生生活を模索する取り組みの一つとして、2021年から学生広報アンバサダー13名が活動しており、情報発信や博物館の改善活動に携わっています。

中坪 広大には、学生スタッフ組織「HUMs」とボランティア団体「CSR」*があり、企画展示やデジタルミュージアムでの発信を行っています。阪神・淡路大震災以降、社会貢献活動に意欲ある学生が増えたように感じます。学生の高いモチベーションを体現できる場を大学側が用



中坪孝之 広大館長

大学博物館の可能性

中坪 学びは実学にのみ価値があるわけではなく、文化や博物学も有意なものです。専門家の間だけで語っていても社会は振り向いてくれません。地域や市民に寄り添い、人材を共に育てていく。学校でも家庭でもなく知的な刺激を受けられる場、「第三の学び場」を博物館で創っていきたいと思っています。

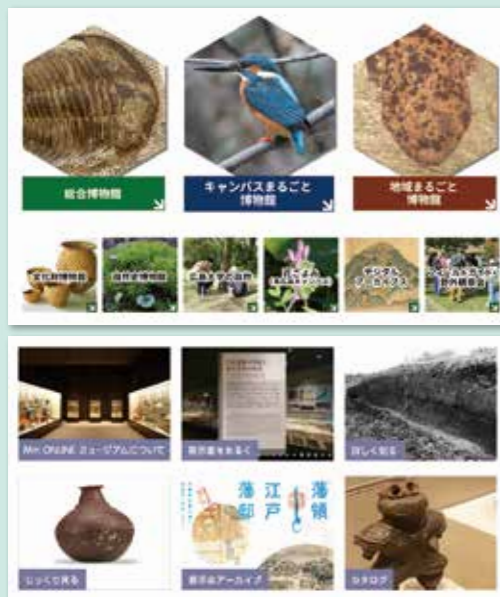


昨年開催の企画展「古代常陸の雄・三味塚古墳」(会期:2022年7月8日~8月7日)

黒曜石に関する記事は2ページへ

しています。長野県長和町との黒曜石製石器の文化、茨城県との三味塚古墳、宮崎県延岡市との譜代大名内藤家文書などです。今後は小中学校への出張講義にも取り組んでいきたいと考えています。専門家だからこそ、知識を持ち合わせていない層に「専門を語らずとも専門を伝え、普及させる工夫をしていきたいです。

両館のオンラインミュージアムはコチラ!!



広島大学総合博物館 デジタルミュージアム



明治大学博物館 オンラインミュージアム

千葉 明大では、本年4月の博物館法改正に伴い、登録博物館への申請を計画しています。同法の改正では、博物館の事業に「資料のデジタル・アーカイブ化」が追加されます。より多くの方々が博物館に足を運び、本物を見ていただくための導線をデジタルの活用から構築していきます。

中坪 大学博物館は「この世の様々な物事の価値を知っている人を育てる場」になり得ます。そして、「大学博物館が身近にあつて良かったよね、社会が豊かになる大学博物館っていいよね!」と言っていたいただきたいです。

千葉 次は中坪館長に明大へお越しいただき、更に交流を深めましょう。本日はありがとうございました。

*HUMs(Hiroshima University Museum students)

2018年から活動、所属10名、昨年は東広島市立美術館にて「生き物のカタチ展」を開催。

*CSR(Campus Student Ranger)

2020年から活動、所属20名、Instagramでも東広島キャンパス内の動植物などを投稿中。



出張展示 2022.4.26
【会場】東広島市立美術館
【開催時間】9:00~17:00 (4/26)
【企画・展示】HUMs (広島大学)
2022.2.22[火]~4.23[土]
【会場】広島大学総合博物館 本館
【開催時間】10:00~17:00



Instagramはコチラ!!

意すること、学生は成長の機会を得ますし、博物館も充実を図ることができます。

千葉 今後、両館の学生による交流が持てると良いですね。まずはオンライン形式になるかと思いますが、所属大学や学部の異なる学生が集い、青春の濃密な時間を過ごして欲しいです。

展示レビュー 2022年度特別展（会期：2022年10月14日～12月14日） 「新しいお殿様——所替・その後——」

小酒井 大悟（東京都歴史文化財団学芸員）

はじめに

会期末が迫りつつあった2022年12月3日、遅ればせながら本展を見学に訪れた。本展は、明治大学所蔵の内藤家文書を中心に、江戸幕府によって領地の移動を命じられる「所替」が大名家や家臣、領民に与えた影響、そして、移動先で大名の統治が新たに始まるようすを詳細に明らかにする企画である。



会場入口

な事項を説明する。

続く「Ⅱ 内藤家の歴史」は、近世における内藤家の所領の変遷、関ヶ原の前哨戦・伏見城の戦いで戦死した内藤家長や、その跡を継ぎ磐城平藩（現福島県に所在）の大名となった政長らの姿と事績、家臣団構成など、おもに日向国延岡（現宮崎県）に移るまでの内藤家の来歴を扱う。

「Ⅲ 延岡への所替」では、延享4年（1747）に幕府から命じられた延岡への所替について、内藤家の新たな所領の構成と配置、延岡への所替に際しての家中や領民の対応といった点から迫る。

「Ⅳ 東から西へ」は、延岡への所替が内藤家に与えた影響について取り上げ、前領主・牧野家から幕府への献上品に関し引き継ぎを受けていたこと、国元から江戸への廻米がなくなり、大坂で年貢米を売却し、資金調達をして江戸に送るようになったこと、長崎奉行や長崎代官との間に年頭挨拶や踏絵借用のかかわりが生じたことなどを紹介する。

「Ⅴ 統治のはじまり」ではおもに、延岡の新領主となった内藤家が破損箇所が多かった延岡城の修復のほとんどが古文書や絵図で、形状でいえば平面の資料となる。古文書や絵図は、展示を通じて歴史像の構築・叙述に大きな力を発揮するが、立体的資料のようないまぬ高さがないため、ともすれば壁面などの背景が空しく、さみしい印象の空間になってしまいかねない。しかし、本展では、たとえば展示室奥のいちはん横幅と奥行きのあるケースで、壁面には内藤家の江戸藩邸も描かれる「江戸一目図屏風」や延岡城下のようすを主題とする「延岡城下図屏風」の画像を印刷した大きなタペストリーを、前面の展示台には古文書とともに、横幅を活かして、江戸から長崎に至る道中の風景を描く「日本東西道中画」の全場面を展示しており、とても見応えがあった。このように、古文書や絵図を多用しつつも、見応え・迫力のある空間づくりに成功していると思う。



タペストリーで演出されたケース展示

一方、今後の課題と思われる点も挙げると、本展では、多数の古文書が出版されていたが、解説文や現代語訳は付られていなかった。展示スペースとの兼ね合いなどの事情もあるが、一般の方が古文書を実見する貴重な機会であることを考える



ハンズオンコーナー

幕府に願ひ出たことが扱われており、修復場所の内容を示す絵図や、修復を許可する幕府老中の奉書などを展示する。

「Ⅵ 延岡領の町と村」では、内藤家と領民との関係、飛地や山間部に多く居住し支配の末端を担った郷士たち、飛地の豊後領の支配などに注目し、延岡領の町・村のようすに迫る。

終章にあたる「Ⅷ お殿様と領地」では、所替を命じられたのち、寛延3年（1750）に大名・内藤政樹がはじめて延岡領に入った「御初入」の準備や記録を紹介し、本展が締めくくられる。

なお、会場出口付近にはハンズオンコーナーが設けられ、資料のレプリカや縮小模型を、実際に手で触れ、観察できるようになっていた。

と、具体的にどのようなことが書いてあるのかを理解するための手助けが、本展の核となる古文書の何点かだけでも、あってよかつたのではないかと。



幕府へ献上される塩鮎が描かれた記録

また、本展のⅣでは、幕府への献上品を復元したレプリカを作るような試みがあっても面白いかもしれない。これは予算の問題を考慮しないアイデアの一つに過ぎないけれども、内藤家文書などの古文書が有する豊かな情報を、一般の来場者に対していかにわかりやすく、価値ある形で示すことができるのか、その方法は今後模索される必要がある。

おわりに

以上、雑駁な感想を述べたきらいがあるが、本展は、日本近世史を専門としている私にとって学ぶところが多く、とても充実した内容の企画であったことは確かである。担当者はじめ、関係各位の多大なご尽力に、末筆ながら敬意を表したい。

2 成果と課題

所替が内藤家や領民に与えた影響、および新領地・延岡で同家の統治が始まる様相の解明という、本展の目指すところは達成されていたと思う。その上で、本展の成果として、次の点が指摘できる。

1 点目は、領主たる内藤家と領民の関係の描き方である。両者の関係は、内藤家の年貢徴収の仕方などによって緊張状態となることもある一方、祭礼やインフラ整備での経費の支出など、領民の暮らしを維持する領主としての役割を内藤家は求められ、これを果たしていたとして、両者の関係のいわば協力的な面にも目配りしていた。



郷士などが「立ち帰り御供」を願ひ出た記録

また、磐城平において内藤家が領民のなかから武士的な特権を認めてきた郷士などが、所替にあたり内藤家からその身分を解消されるも、延岡や大坂、江戸などへの「立ち帰り御供」（目的地まで御供・荷物輸送に従事し、完了後は磐城平に帰る）を願ひ出たことに触れ、彼らの身分意識や領民と内藤家との「結びつき」と呼ぶうる関係性をわかりやすく示していたことは

逃げた足軽

日比 佳代子 (刑事部門学芸員)

譜代大名の内藤家は、元々は三河国(現・愛知県)の者で、古くから徳川家に仕え、天正18年(1590)の徳川家の関東移封に従って関東に移動した。関東では佐貫(現・千葉県)などに領地を与えられ、その後、元和8年(1622)に陸奥国磐城平(現・福島県)に、さらに延享4年(1747)に日向国延岡(現・宮崎県)へ所替した(所替とは、幕府の命令によって領地を移動することである)。幾度か領地が替わった内藤家であるが、天正19年(1591)に江戸で拝領した屋敷は、最後まで移動することはなかった。それが、虎ノ門にあった屋敷である。また、この他に六本木や渋谷などにも屋敷を持っていた。虎ノ門屋敷に藩主が住み、六本木屋敷には隠居した藩主や世子が住んだ。渋谷屋敷は、藩主の母親などが住んでいた時期もあるが、郊外にある山林に覆われた山屋敷であったから、主に火災時の避難邸や江戸屋敷で使用する材木の供給地として利用されていたようである。屋敷の主人がいない時期には、渋谷屋敷に藩士の配置は殆どなく、藩士達は主に虎ノ門屋敷と六本木屋敷に住んでいた。

虎ノ門と六本木の屋敷には多くの武士が住んでいたが、その中には武士の最下層に位置づけられる「足軽」もいた。一口に足軽といっても藩によってその位置づけは違う。内藤家の場合、磐城平時代は、磐城平領に移動する前から内藤家に仕えている家の者を「相統筋」の足軽とし、この「相統筋」の足軽でなければ名字を名乗ることを許

していなかった。名字を名乗れるか否かは、武士の特権の重要な要素の一つであるから、代々内藤家に仕えた足軽だけが、この特権をゆるぎされていた訳である。

内藤家が延岡に転封すると、前領主の牧野家は庄屋達を名字御免(名字の使用を許すこと)としていたから、内藤家も現地支配の威勢を維持するために、彼らを名字御免とした。そして、バランスを取るために、これまで名字を名乗っていなかった最下層の武士達も名字御免とした。江戸の足軽にも寛延元年(1748)10月に名字御免が伝えられている。しかし、これらの者達の名字使用は、延岡領内でのみ使用できる、つまり他領での使用や、他領の者に対しての使用は許されないという条件がついていた。なお、江戸の場合は江戸屋敷でのみ使用できる、ということであろう。こういった対応からも分かるように、内藤家の足軽は、武士身分の者とそうでない者の境目に位置づけられるような存在だったのである。

延岡への移動後、所替で多額のお金がかかった藩は、藩士数の削減に努力しており、足軽の数も減らそうとしていた。磐城平時代には藩主が江戸屋敷にいる期間は、定府(江戸に在住すること)の足軽40人に加えて、国元から126人の足軽が江戸詰として送り出され、江戸屋敷で仕事をしていた。しかし、転封後は遠国という事もあり、この規模を維持することはできなくなった。国元と江戸での調整の結果、江戸屋敷の足軽は、定府の足軽40人、国元から1年交代で江戸屋敷に送り出される足

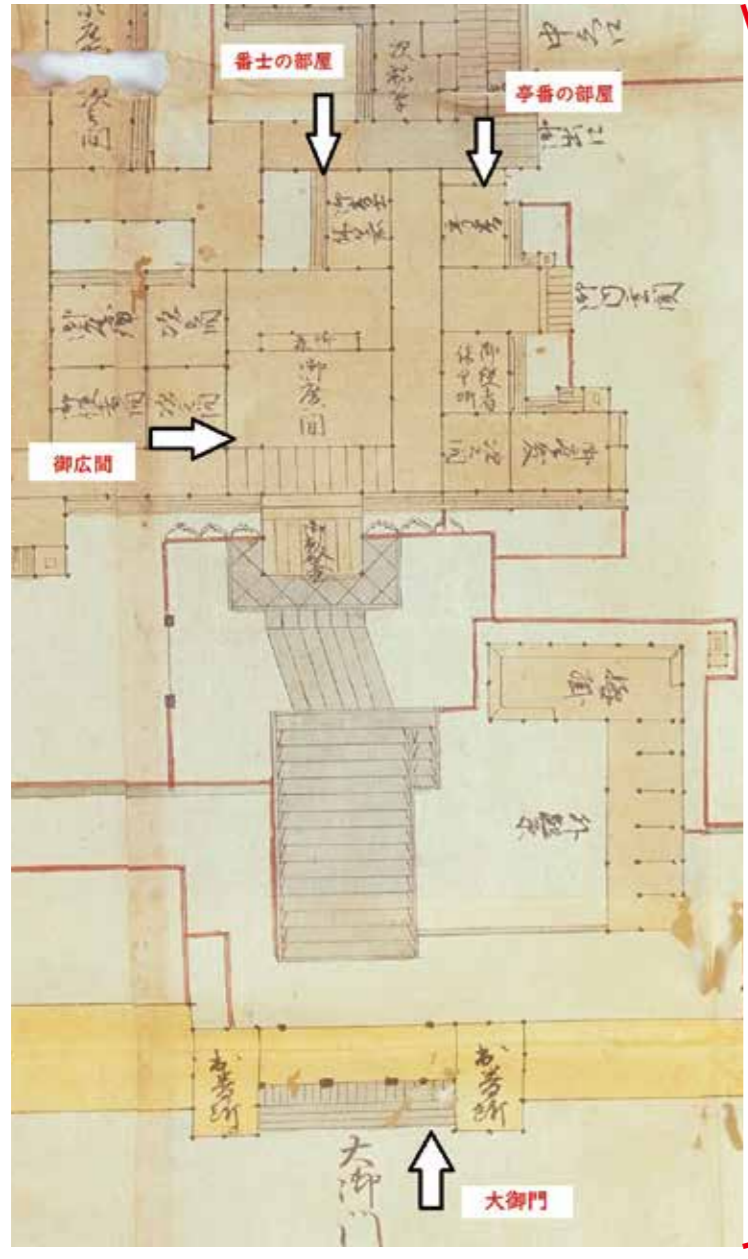
軽70人の合計110人体制に変更されることになった。一口に江戸屋敷の足軽といっても、代々仕える「相統筋」の足軽もいれば、新参の足軽もいる。江戸育ちの者もいれば、延岡からやってきた者もいる。その背景は様々であった。そして、大勢の足軽の中には、問題を起こす者もいた。

内藤家が延岡へ所替した延享4年の12月、文六という足軽が、夜中に屋敷内をむやみに徘徊し不届きであるとして取り調べを受け、御門前追い払い(藩邸の門の前で追い払う)の処罰を受けている。この処罰では闕所(財産没収)の付加刑が科され、文六の持ち物も没収された。取り上げられた彼の財産は、わずかに、古櫃一つ、古枕一つ、硯箱一つで、江戸屋敷の足軽の生活が決して豊かなものではないことを窺わせる。屋敷を徘徊した程度で処罰を受けるとは、といぶかしく思う向きもあるかもしれない。この徘徊の先になにかがあるのか、それは次の事例が教えてくれる。

寛延元年8月27日夜、虎ノ門屋敷での出来事である。この日、泊まりで大広間の番をする藩士は、佐々半蔵、太田用助、野口藤右衛門の3人、亭番の足軽は喜久右衛門と忠次右衛門、下働きの中間は伝助であった。亭番とは宿泊所の当番という意味かと思われるが、足軽の喜久右衛門と忠次右衛門は共に働き、夜になっていつも通り片付けをして大広間のそばで2人も休んだ。朝になり、忠次右衛門は掃除に取りかかろうと、喜久右衛門

を起こすために紙帳(紙製の蚊帳)を開けたが、中に喜久右衛門の姿がない。中間の伝助を、喜久右衛門の部屋に呼びに遣わしたが、部屋にも姿はなかった。その後、藩士達が使う寝具の葛籠が空になっていることが分かり、屋敷の門の外で風呂敷包みやそれらの寝具の一部が発見された。数日後には、御座敷や大廊下の釘隠(釘の頭を隠すために付けられた装飾具)が5力所なくなっている事も発見された。御座敷まわりの掃除は亭番の仕事だから、釘隠の紛失も喜久右衛門が犯人に違いないということになった。しかし、喜久右衛門の行方は知れず、結局、一緒にいたのに熟睡していて何も気がつかなかったという忠次右衛門と中間の伝助が永暇(主従関係を解くこと、つまり、解雇されたのである)に処された。この事例は、屋敷の中で働く足軽が、盗みをして逃げてしまうようなことがあるのだと教えてくれる。だからこそ、足軽が屋敷内を徘徊したという理由で処分もされるのであろう。

同じ年の間10月にはこんな事もあった。この月、大中寺という寺を通じてある願書が内藤家に提出された。4年以上前、延岡から江戸へ送られた足軽の伴左衛門が、江戸で失踪した。伴左衛門は今では町人となり、惣兵衛と改名し暮らしている。惣兵衛は、延岡や内藤藩の江戸屋敷には、親類などがあるので、どうか御座敷の御門の出入りを許してくださいと願っているというのである。この願いを受けて、失踪前に惣兵衛が問題などを起こしていなかったか、関係者に聞き取りが行われた。調べた結果、惣兵衛は特に問題は起こしておらず、失踪する程の理由もなく失踪したらしいということになった。そうであれば問題はなかるという事で、惣兵衛の屋敷への出入りは許された。惣兵衛は、足軽として延岡から江戸にでて、屋敷から失踪したけれど、町人として渡世をわたり、なんとか屋敷出入りも許されることになったのである。この事例は足軽という身分の流動性や不安定さを示唆している。そしてなにより、逃げた足軽のその後の人生が分かる珍しい事例である。



部分 大広間



内藤家の虎ノ門屋敷
('江戸御上屋敷絵図'
内藤家文書・政道氏寄贈分 1-6-3)

本文中公開した成果はJSPS科研費26770230(代表日比佳代子)の助成を受けたものである。

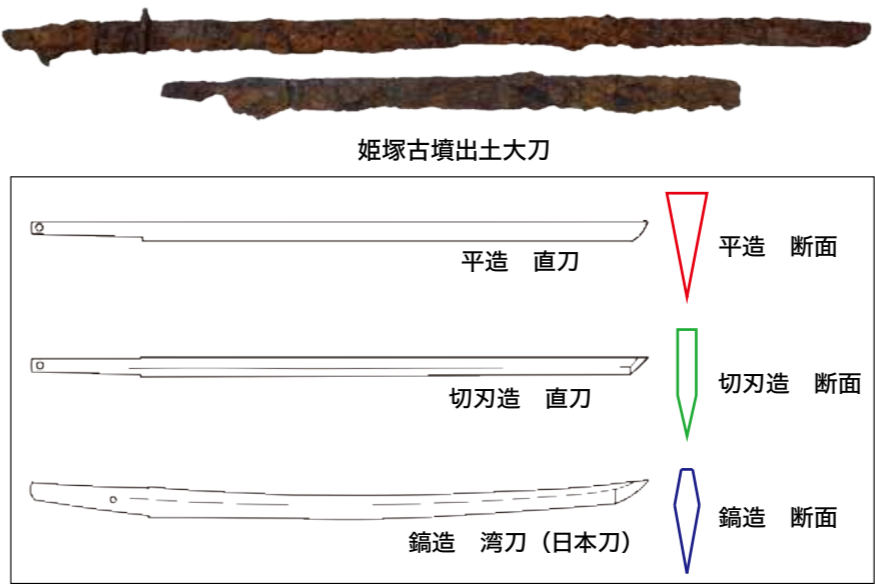
《史料》延享4年「万覚帳」(『内藤家文書』1-6-34) 寛延元年「万覚帳」(『内藤家文書』1-6-35) 《参考文献》日比佳代子「転封実現過程に関する基礎的考察―延享四年内藤藩の磐城平・延岡引越を素材として―」(『明治大学博物館研究報告』16、2011年)

姫塚古墳の鉄製大刀に見る日本刀の起源

竹内 理来

刀

「刀」という言葉から最も想像されるのは、湾刀^{※1}で、^{※2}を指す、いわゆる日本刀の姿だろう。実は、こうした姿の日本刀が成立したのは平安時代の後期から末期にかけてであり、それ以前は直刀と呼ばれる反りのない姿をしていた。今回は、姫塚古墳（明治大学での登録名：北ノ谷2号墳）から出土した大刀をもとに、古代鉄刀の姿の変遷について紹介する。大刀とは、日本刀成立以前の刀のなかでも長いものを言い、日本刀の太刀とは区別される。



愛知県豊橋市に位置する姫塚古墳は、6世紀末〜7世紀初頭に築造されたと考えられている。1953年に明治大学教授であった後藤守一氏をはじめとした明治大学関係者と地元研究者らによって調査が行われ、須恵器、鉄製武器類、装身具などが出土した。この鉄製武器のうち、刀剣類は大刀6点と剣1点が見つかっている。うち1つは柄縁^{※3}金具や鍔、足金物と呼ばれる金具が残り、当時の拵の名残をとどめている。

姫塚古墳の大刀は全て直刀であり、刀身には鍔がなく平面で、刀身の断面が二等辺三角形になる形状である。これは造込み^{※3}の種類において平造に分類される。平造の大刀は国内では古墳時代から平安時代にかけて作られていたが、日本刀の成立以降、平造は短刀によく見られる造込みとなり、太刀など長さのある日本刀で平造のものはほとんど見られなくなる。

この大刀は姫塚古墳が築かれた当時における一般的な姿と考えられるが、時代が下るにつれて大刀の姿は直刀平造から変化していく。徐々に柄や刀身に反りを持つものが増え、造込みについても、鍔を持たない平造から鍔を持った切刃造^{※4}、そして11世紀半ばから12世紀ごろに鍔の位置が棟に寄った鑄造^{※5}へと移行する。

戦闘において、姫塚古墳のもののような平造直刀の大刀を使用していた時代は、まだ鍛錬や研磨の技術が高くなかったため切れ味があまり鋭くなく、突進しながら大刀を敵に打ち当てて擦るように斬っていたと考えられる。それには敵に当てやすく、長さも確保できる直線的な形状が適していた。しかし技術の向上により切れ味が良くなるにつれ、突進せずとも手元での操作のみで斬ることができるようになり、これに対応して大刀の形状が変化したとみられる。

まず、反りがつくことにより引き斬りができるようになった。これは直刀による斬りよりも軽い力で行うことができる。加えて、反ることによって重心が手元に寄るため、実際の重さよりも軽く扱えるようになる。また、切刃造と鑄造は側面の鍔によって斬る対象に触れる面積が平造よりも小さくなるため、より抵抗なく斬ることができるようになる。さらに鑄造は、切刃造よりも刃先の角度が鋭く切れ味が良い上、鍔で刀身の厚みを確保しつつ、棟側と刃先側を薄くできるため、強度を保ちながらの軽量化が可能である。総合的に見れば取り回しを良くし、より少ない力で高い攻撃力を得るための変化であり、実戦を念頭に置いた改良と言ったことができるだろう。

今回ご紹介した姫塚古墳の大刀は、日本刀の祖先ともいえる姿をした刀剣である。考古部門の常設展示には切刃造の大刀のレプリカもあるので、それらを見比べながら日本刀の姿の変遷に思いを馳せてはいかがだろうか。

註 ※1 反りのある形状をした刀剣。

※2 刀身の側面にある稜線。

※3 刀身の立体的な構造。主として平造、鑄造などがある。

※4 刀身側面の半ばから刃先寄りに稜線を持った造込み。

※5 刀身側面の半ばから棟寄りに稜線を持った造込み。

〈参考文献〉

- ・岩原剛2003「姫塚と段塚—三河における古墳出土遺物の研究(III)—」『豊橋市美術館研究紀要』第12号
- ・鈴木 信2005「北・東日本の出土刀にみる彎刀の起源」『月刊考古学ジャーナル』No.532
- ・廣井雄一2005「刀姿・刀装具の様式変化—直刀から日本刀発生にいたるまで—」『月刊考古学ジャーナル』No.532
- ・小池伸彦2022『古代の刀剣—日本刀の源流—』吉川弘文館
- ・宮崎政久2022『日本刀が語る歴史と文化【増補版】』雄山閣

幻燈種板

戸部 瑛理

当館の「時田昌瑞ことわざレクシオン」には、ことわざを伝える媒体・商品の一例として、明治時代に製造された13枚の幻燈種板が含まれている。

幻燈とはガラス製の種板に描かれた絵や写真を光で照らし、レンズを通して拡大、スクリーンに投影するものである。その原型は、17世紀の西洋において発明された投影装置——「マジック・ランタン」であり、日本では江戸時代に渡来後「写し絵」もしくは「錦影絵」として見世物小屋や寄席などにおいて興行のかたちで普及した。明治時代には、

文部省の官吏が留学先の米国から持ち帰り「幻燈」と呼ばれるようになる。文部省は、幻燈を教材として学校教育に導入し、教育幻燈会が日本各地の小学校などで開かれた。その対象には生徒に限らず保護者も含まれ、幅広い層に向けた上映・教育がなされていたことが判明している。また幻燈は、製造・販売する業者から誰でも購入が可能だったことから、付属の説明文にしたがって説明をすれば上映できる、利用間口が広い媒体でもあった。それでは、「レクシオン」からいくつかの種板を見てみよう。



幻灯機（東京都写真美術館所蔵）種板をセットして投影する



- ①：一字千金
- ②：大きなほら吹く人・山はる人
- ③：口ばかりの人・長屋の古狸・近所の電信かく

種板に書かれたことわざには、今日では馴染みがないものや、ことわざとまでは言えない慣用語もある。

『図説ことわざ事典』によれば、①「一字千金」は「たったの一字だけで大変高い価値があることからいうもので、優れた文字や文章のこと」、②「大きなほら吹く人・山はる人」の「山を張る」とは、「当て推量で適当なことをいうこと。また、万が二にもうまく行けば良いとの願いのもとに事をなす意」とある。また、この「山に張り紙をする」という絵は、江戸時代の狂画集『謔臍の宿替』にもみられる。③「口ばかりの人・長屋の古狸・近所の電信かく」の「古狸」は、明治時代に刊行された『諺語大辞典』には「老獪なる者をいふ。男の方に用ふ」と説明されているが、この種板には女性として描かれている。

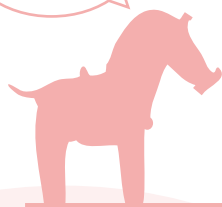
明治時代、「教訓いるはたとえ」といったようなタイトルで錦絵が多く流布した事例から、ことわざがわかりやすい慣用語表現として、庶民に対する道徳心の涵養に活用されていたことがわかっている。具体的にどのような用途でこれらの種板が使用されていたか定かではないものの、同様の用途に用いるための媒体だったと考えられる。

〈参考文献〉

- ・藤井乙男編 1910『諺語大辞典』有朋堂書店
- ・岩本憲児 2002『幻燈の世紀』森話社
- ・時田昌瑞 2009『図説ことわざ事典』東京書籍
- ・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編 2015『幻燈スライドの博物誌：プロジェクト・メディアの考古学』青弓社
- ・東京都写真美術館編 2018『マジック・ランタン 光と影の映像史』青弓社
- ・青山貴子 2019『遊びと学びのメディア史』東京大学出版会

M2 カタログ

大好評!



古墳Tシャツに 新色登場!



考古部門で常設展示されている茨城県小美玉(おみたま)市の玉里舟塚(たまりふなづか)古墳をモチーフにしたTシャツに新色が登場しました。舟塚古墳の埴輪にしばしばみられる紺(灰)色の塗料をイメージしたネイビー色の地に、土を思わせる鮮やかな黄色の墳丘と埴輪のデザインがよく映えます。

サイズ XXL・XL・L・M・S
価格 1,300円(税込価格)

ミュージアムショップ開室時間

月~金 10:00~16:30 土 10:00~12:30
※日曜日・祝日・大学が定める休日および夏季・冬季休業日は閉室
※販売品・価格は変更する場合があります

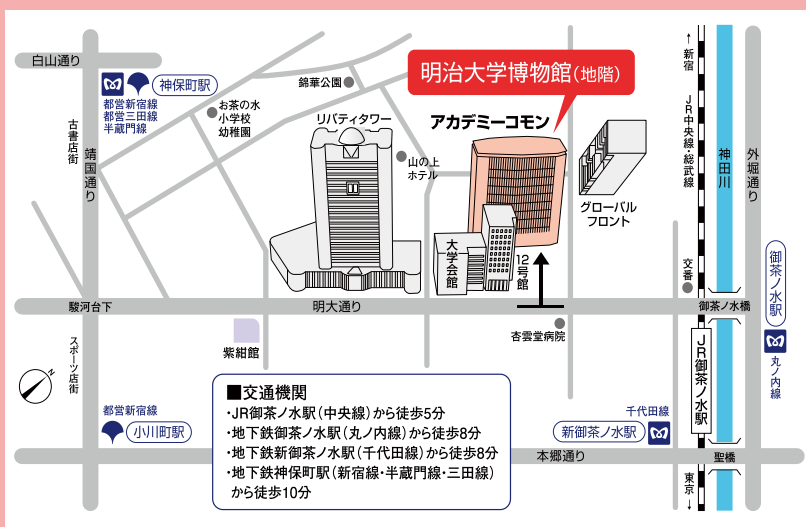
来館案内

展示室ご利用案内

- ◆開室時間
平日 10:00 ~ 17:00 (入館は16:30まで)
土曜 10:00 ~ 16:00 (入館は15:30まで)
- ◆休館日
日曜・祝日・大学が定める祝日
夏季休業(2023年8月10日~16日)
冬季休業(2023年12月26日~2024年1月7日)
8月1日~9月19日の土曜
- ◆観覧料
常設展無料 特別展は有料の場合があります。

図書室ご利用案内

- 現在新型コロナウイルス感染症感染防止対策のため、オンラインによる事前予約制を導入しています。詳細は博物館ホームページをご覧ください。
- ご利用は蔵書の閲覧・コピーのみとなります。



現在新型コロナウイルス感染症感染防止対策のため、展示室・図書室・ミュージアムショップの開室日時については変更・臨時閉室する場合がありますので、博物館ホームページで確認してください。

